さるべき人（連体詞）は（係助）、とう（形・ク活用・用（ウ音便））より（格助）御心魂（形・ク活用・用）の（格助）猛く（形・ク活用・用）、御守り（形・ク活用・体）も（係助）こはき（推定「めり」終）なめり（断定「なり」体（撥音便））と（格助）おぼえ（下二・未）侍る（（補動）ラ変・体）は（係助）。花山院（（しも）（やみ））の（格助）御時（格助）に、五月下つ闇（格助）に、五月雨（係助）も過ぎ（接助）て、いと（副詞）おどろおどろしく（形・シク活用・用）かきたれ（形・シク活用・用）雨（格助）の（格助）降る（四段・体）夜、帝、

さうざうし（形・シク活用・終）と（格助）や（係助）おぼしめし（四段・用）（ⓢ話し手→帝）けむ（過去推定「けむ」体）、殿上（（てんじやう））に（格助）出で（下二・未）（尊敬「さす」用）させ（（補動）四段・用）おはしまし（四段・用）て（接助）遊び（四段・用）おはしまし（（補動）四段・用）ける（（ⓚ話し手→帝）過去「けり」体）に（格助）、人々、物語（四段・用）申し（四段・用）など（副助）し（サ変・用）給う（（補動）四段・用（ウ音便））て（接助）、昔恐ろしかり（形・シク活用・用）けることども（過去「けり」体）など（副助）に（格助）申しなり（四段・用）給へ（（補動）四段・已）る（完了「り」体）に（接助）、

「今宵（副詞）こそ（係助）いとむつかしげなる夜なめれ。かく（形動・ナリ・体）人がちなる（形動・ナリ・体）だに（副助）、けしきおぼゆ（下二・終）。まして（副詞）、もの離れ（接頭語＋下二・用）たる所（完了「たり」体）など（副助）いかならむ（形動・ナリ・未）。さあらむ（副詞）所（推量「む」体）に（格助）、一人いな（ナ変・未）む（推量「む」終）や（係助）。」と（格助）仰せられける（下二・未　尊敬「らる」用　過去「けり」体）に（接助）、「えまから（四段・未）じ（推量「じ」終）。」と（格助）のみ（副助）申し（四段・用）給ひ（（補動）四段・用）ける（過去「けり」体）を（接助）、入道殿（係助）は、「いづくなり（断定「なり」終）と（格助）も（係助）、まかり（四段・用）なむ（強意「ぬ」未　意思「む」終）。」と（格助）申し（四段・用）（ⓚ入道殿→帝）給ひ（（補動）四段・用）けれ（過去「けり」已）ば（接助）、さるところ（連体詞）おはします（四段・体）帝に（断定「なり」用）て（接助）、（ⓢ話し手→帝）「いと（副詞）興あることなり（断定「なり」終）。さらば（接続詞）行け（四段・命）。」道隆（係助）は豊楽院、（ⓢ話し手→入道殿）道兼（係助）は仁寿殿（格助）の（格助）塗籠、道長（係助）は大極殿（格助）へ（格助）行け（四段・命）。」と（格助）仰せ（下二・未　尊敬「らる」用）られ（過去「けり」已）けれ（ラ変・已）ば（接助）、よそ（格助）の君達（係助）は、便なき（形・ク活用・体）ことを（格助）も（係助）奏し（サ変・用）て（完了「つ」用）ける（過去「けり」体）。（ⓢ話し手→帝）かな（終助・詠嘆）と（格助）思ふ（四段・終）。

（将来・後年）立派になる人は、若いころから胆力（お心）が強く、神仏のご加護も強いようだと思われることだよ。花山天皇の御代に、五月下旬の闇夜に、五月雨の時期も過ぎて、たいそう不気味に激しく雨が降る夜、天皇が、さびしくお思いになったのだろうか、殿上の間においでましになられて、（管弦・和歌などの）お遊びになっていらっしゃった時に、人々がお話（世間話）を申し上げなどしなさって、昔の恐ろしかったことなどに話題がお移りになったところ、（帝が）「今夜はたいそう気味の悪い夜であるようだ。このように人が多くいてさえ、不気味に思われる。まして、（人気のない）離れた場所などはどうであろう。そのようなところに、一人で行けるだろうか。」とおっしゃったが、（その場にいた人々は）「とても参ることはできないでしょう。」とだけ申し上げなさったのに、入道殿（道長）は、「どこへでも、参りましょう。」と申し上げなさったので、そのような（ことを面白がる）ところのおありになる天皇で、「たいそう面白いことだ。それならば行け。道隆は豊楽院、道兼は仁寿殿の塗籠、道長は大極殿へ行け。」とおっしゃられたので、他の方々（三人以外の人々）は、（入道殿＝道長が）不都合なことを申し上げたものだなあ、と思う。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/